郊外住宅団地の居住形態別に見た災害が高齢者の交流活動に与えた特性

－戸建住宅地と集合住宅地の比較から－

THE CHARACTERISTICS THAT AFFECTED TO COMMUNICATION ACTIVITIES OF ELDERLY
BY DISASTER, FROM THE COMPARISON OF LIVING ARRANGEMENTS
IN SUBURBAN RESIDENTIAL AREA

－ By the comparison between detached housing area and apartment area －

吉村 東*

Azuma YOSHIMURA

In detached housing area, the communication activities in the region have two poles tendency such as the following, 1) the active peoples changed to more "neighborhood" by disaster; and 2) the inactive peoples changed to "suburbs outside-friends" and "family-focus" by disaster. On the other hand, in apartment area, 1) the active peoples changed to "friends" by disaster; and 2) the inactive peoples changed to "hobby-friends" and "family-focus" by disaster.

Also in the region of either, the inactive peoples are specializing in "family", and the communication activities are becomes estranged in the region (neighborhood), further they are diluted.

In this way, it was found that differed large according to living arrangements after disaster, for the communication activities of the elderly peoples. Also they become estranged both activities and consciousness of community, and had especially affected on the activities in terms of emotion of the elderly peoples in apartment area.

Keywords : *Change of Communication Activity, Suburban residential area, Social capital, Area management, Detached housing area, Apartment area*

交流活動の変化, 郊外住宅団地, 社会関係資本, 地域マネジメント, 戸建住宅地, 集合住宅地

1. 研究の背景と目的

平成 23 年 3 月 11 日に起きた宮城県三陸沖の大地震は、東北から関東沿岸部に大きな被害をもたらした。また、4 月 7 日の余震による二次災害がさらに被害を増加させた。

仙台都市圏でも被害は大きく、特に高齢化が進行している造成時期の古い郊外住宅団地では、老朽化した戸建住宅や集合住宅に居住している高齢者にとって建物・周辺環境の被害や精神的ショックの影響にも大きなものがあった。そのような中で地域における交流活動は、高齢者の感情面にどのような影響をもたらしたのだろうか。

筆者はこれまで高齢者の交流活動を社会関係資本^{注1)}として捉え、平常時における高齢者の交流活動の実態・意識の変化等を団地全般として戸建住宅居住者を中心に把握^{1) 2)}してきた。

それらの調査^{注2)}によると、平常時における交流活動は消極的になっている高齢者は多いとは言えず、現状維持を志向する人が多数派であった。しかし男性の場合、後期高齢者では交流活動に消極的思考の人がみられ、同様に退職後間もない前期高齢者でも選択的・個人的志向から、自律的な交流活動の活発化はそれほど期待できない状況にあると言う傾向がみられた。このことから、最近の孤独死や行方不明の状況からも益々交流活動は地域を支える重要な要素と

考えられ、「地域との絆」のつながりの形成等が強く望まれている。

本研究における「高齢者の交流活動」に関する既往研究は、「高齢者の交流の場としての近隣型小売商店の役割に関するもの⁴⁾」「在宅高齢者の人的交流に関する研究⁵⁾」等が挙げられるが、高齢者の交流の場の使われ方や介護面における交流活動と実態面が主体となっている。一方本研究では交流活動の意識面において、感情面等の交流意向をより直接的に捉えることができる具体的な事例として「自由記述文」に着目した。「自由記述文」に関しては、「自由記述回答の文の長さに着目したもの⁶⁾」「言語形式面からみた文章に関するもの⁷⁾」「感情・意志表現の機能を取り入れたもの⁸⁾」などが挙げられるが、高齢者の交流活動を社会関係資本の基礎として捉え、災害を契機に実態の変化・感情意識等の両面で分析したものは見られない。

そこで本研究は、現在、地域^{注3)}間交流が希薄となり、社会関係資本の強化が望まれる「郊外住宅団地」を取り上げ、団地内の戸建住宅居住者と集合住宅居住者を対象とし、災害を契機とした「交流活動の実態」と「交流活動をめぐる意識」の変化の分析から、高齢者の地域間交流活動の変化を捉え、特に、意識の分析においては、自由記述回答文^{注4)}からより具体的な交流意向に着目し、居住形態別に交流活動の実態・意識の特性を把握することを目的としている。

本稿は、住宅系研究報告会論文集7に発表した内容³⁾を基に新規分析を加え、居住形態の相互比較の観点から加筆・修正したものである。

* COLUMBIA: バジエ・デ・カウカ地域局
SENA・博士(工学)

Columbia, Social Security Department, Local Station of Cauka in Paje, SEN, Dr. Eng.

2. 研究の方法

本研究は前述したが、高齢化により高齢者の居住が多く見込まれ、交流活動が社会関係資本としての意味を強めつつあると考えられる住宅団地を対象とした。この社会関係資本が地域力の基礎という観点から重視すべき交流活動は、「地域住民間の交流活動」が中心となってくる。そこで、地域の社会関係資本の立場から、地域の間人関係が希薄なことは望ましくないことと考えられることから、本研究では、地域との交流活動を中心に把握している。

実施した調査²⁾から、交流活動の実態のデータを抽出、数量化Ⅲ類を適用し、居住者属性等との関連性を把握した。また、意識の面では自由記述欄に回答した人を対象に、自由記述文を内容別に類型化し「論理の展開^{注5)}」「文章の長さ」から意見文の構造の特性を把握する。さらに「感情のカテゴリー^{注6)}」に着目し、特に災害を契機に感情を多く抱いた（出現頻度が高い層）高齢者を抽出し、居住主体や文章構成等との関連性で分析を行った。

3. 調査の対象と概要

本研究では、調査対象地は前報^{2) 3)}と同様であり仙台市の郊外住宅団地で、社会関係資本の強化が望まれる高齢者が多く見込まれる、造成時期が40年以上と古く、団地内に病院や商業店舗、福祉施設などの公共施設がある程度充実している鶴ヶ谷団地^{注7)}とした(図1、表1)。調査はアンケート調査で、直接訪問しポストイングにより調査票を全世帯に配布し、後日郵送で回収、調査内容を後日伺い補足する形式で行った。調査日は平成23年9～10月^{注8)}。回収率は戸建住宅43%、集合住宅14%であった。調査の概要を表2,3に示す。

3-1. 調査対象者の特性

調査配布数は戸建住宅2,038票に対し、集合住宅2,362票で、回収数はそれぞれ880票(73%)、333票(27%)の合計1,213票である。その中で高齢者の割合は、戸建住宅734票、集合住宅172票の合計906票であった。高齢者全体で見ると、男性も女性も後期高齢者が半数以上と高齢化が明らかである。また家族型は「一人暮らし」「夫婦のみ」の少人数の世帯が多い(表2,4)。居住形態別では戸建住宅では男性が多く一人暮らしが16%、後期高齢者は58%に対し、集合住宅では女性が多く一人暮らしが55%、後期高齢者は45%と、戸建に比べ独居世帯の高齢者率が高いことが特徴である(表4)。

3-2. 自由記述回答者の特性

調査票の自由記述回答者は、戸建住宅321人、集合住宅70人の合計321人(表5)であった。

また、交流活動に関して記述した人の割合は戸建205人、集合45人の合計250人で、回答した人数は戸建の方が多いが、割合で見ると戸建の中で27%、集合の中で26%とほぼ同様である。また女性の65～74歳が最も多く戸建で21%、集合では46%を占めている(表4)。このことから実態・意識では、形態別には差異があるため一つの軸上で分析するのではなく個々の軸上で分析・比較することとする。

4. 平常時と災害後の交流活動の変化

本章では、戸建・集合住宅居住者の高齢者の「平常時」^{注9)}と「災害後」の交流活動の実態の変化を捉え、交流活動の変化の様相から特性の相違を把握することとする。

4-1. 交流活動の実態の変化の全般的領域

図1 調査対象地の位置

表1 対象団地の特性

団地名	町丁番地	造成時期 (昭和・年)	面 積 (ha)	計画戸数・人口 (戸) (人)	駅・距離 (km)
鶴ヶ谷団地	鶴ヶ谷1～8丁目	43～50	180	5,878	23,000
	戸建1,3,4,5,6,7,8	計画戸数:2,300 ― 計画人口: 8050			
	集合2,5,6丁目	計画戸数:3,578 ― 計画人口:14950			
鶴ヶ谷団地	団地特性(総人口・世帯数・単位:人、世帯)				
	総人口(人)	住居の種類別・世帯数(世帯)			
		一戸建	長屋・共同	合 計	
合 計	11,719	2,181	2,950	5,131	
□ H22年度一國勢調査結果・小地域集計より(長屋建・共同住宅データ)					

表2 調査配布・回収数

調査概要(配布・回収数・単位:票、%)			
	一戸建住宅	長屋建・共同住宅	合 計
配布数	2,038票	2,362票	4,400票
回収数	880票	333票	1,213票
回収率	43%	14%	28%
□ 調査日は、2011年9月16、27日・10月13日配布、回収は郵送(返信用封筒)			

表3 調査の概要

□ 調査項目(アンケート調査票内容)									
交流活動の実態と意識					交流活動の実態と意識				
① 直接会話	[平常時]		[災害後]		② 機器通話	[平常時]		[災害後]	
	1) 交流回数・2) 交流相手		1) 交流回数・2) 交流相手			1) 交流回数・2) 交流相手		1) 交流回数・2) 交流相手	
	3) 交流場所・4) 交流内容		3) 交流場所・4) 交流内容			3) 利用機器・4) 交流内容		3) 利用機器・4) 交流内容	
	1) 交流活動の回数の変化					1) 交流活動の回数の変化			
	・ 回数が増えた理由		・ 回数が減った理由			・ 回数が増えた理由		・ 回数が減った理由	
	2) 交流活動のつながりの変化					2) 交流活動のつながりの変化			
	・ つながりが強くなった理由		・ つながりが弱くなった理由			・ つながりが強くなった理由		・ つながりが弱くなった理由	
	3) 今後の交流活動への増減希望					3) 今後の交流活動への増減希望			
・ 今後、増やしたい理由		・ 今後、減らしたい理由		・ 今後、増やしたい理由		・ 今後、減らしたい理由			
居住特性					性 別・年 齢・家族型・居住年数・退職前の職業・退職後の職業・血液型				
					利用交通手段・健康状態・住宅形態・外食回数・趣味・交流姿勢・自宅の被害箇所				
□ 交流活動全般についての意見 (フリーアンサー: 直筆で書いて頂いた記述回答欄)									

注) 交流活動の実態・意識については「直接会話」「機器通話」の2つに大別して調査しているが、本編では、地域との交流活動を直接的に反映すると考えられる「直接会話」について分析することとしている。またここでの機器とは、家庭用電話・携帯電話・FAX・パソコン・はがき手紙のことである。

表4 高齢者の居住形態別・特性

居住者属性		戸建住宅	集合住宅	合 計
①性 別	男 性	428(58%)	70(41%)	498(55%)
	女 性	306(42%)	102(59%)	408(45%)
合 計		734(100%)	172(100%)	906(100%)
②年 齢	65～69歳	109(15%)	36(21%)	145(16%)
	70～74歳	198(27%)	59(34%)	257(28%)
	75～79歳	237(32%)	45(26%)	282(31%)
	80歳以上	190(26%)	32(19%)	222(25%)
	合 計	734(100%)	172(100%)	906(100%)
③家族型	一人暮らし	119(16%)	95(55%)	214(24%)
	夫婦のみ	313(43%)	42(24%)	355(39%)
	夫婦と子供	169(23%)	17(10%)	186(20%)
	夫婦と子供・親	24(3%)	0(0%)	24(3%)
	親と子・兄弟姉妹	8(1%)	11(7%)	19(2%)
	その他	101(14%)	7(4%)	108(12%)
合 計		734(100%)	172(100%)	906(100%)
④性年齢	男性65～74歳	42(20%)	8(18%)	50(20%)
	男性75～84歳	36(18%)	3(7%)	39(16%)
	男性85歳以上	32(16%)	3(7%)	35(14%)
	女性65～74歳	43(21%)	21(46%)	64(26%)
	女性75～84歳	27(13%)	5(11%)	32(13%)
	女性85歳以上	25(12%)	5(11%)	30(11%)
合 計		205(100%)	45(100%)	250(100%)

注) 交流活動に関する自由記述者数については、全年齢層では戸建399人、集合住宅129人で合計528人(全調査者の44%)であった。

図2 平常時と災害後の交流活動の実態の対応分析(戸建)

交流活動の「交流回数」「交流相手」「交流場所」「交流内容」「交流回数の変化」に着目し、数量化Ⅲ類^{注10)}を適用した結果を図2,3に示す。戸建では固有値は1軸0.510、2軸0.434、相関係数にすると0.715、0.657である。得られた軸のうち1軸は正方向「選択的交流」⇔負方向「必然的交流」に対応する軸と解釈でき、2軸は正方向「団地外交流活動」⇔負方向「団地内交流活動」と両軸とも交流相手を中心として領域を区分する軸と解釈できる。一方、集合住宅では固有値は1軸0.515、2軸0.445、相関係数にすると0.718、0.667で、各軸の解釈は戸建と同様な傾向を持っている。

領域的に見ると戸建住宅居住者の場合、1軸、2軸とも負の領域は、「近隣の人」の領域で「ほぼ毎日」「週3回位」、「団地内飲食店」「相手宅」などを使った近隣住民間の交流活動に対応する領域と解釈できる。次に1軸が正、2軸が負の領域は「団地内友人」「団地内役員」「団地内趣味仲間」と、「週1回位」、「団地内集会所」「団地内公園・広場」「団地内商店街」等の団地内での地域交流活動がうかがえる。また、1軸・2軸とも正の領域は「団地外友人」「団地外仕事仲間」「団地外趣味仲間」との「月1回位」、「団地外施設」「団地外飲食店」での交流活動に対応する領域である。1軸が負、2軸が正の領域は「家族」「子息」「親」「兄弟・姉妹」等の身内と、「月1回位」「年数回位」等の回数は少なく、「自宅」「飲食店」等での交流活動がうかがえる。全般に「①近隣の人」「②団地内友人役員趣味仲間」「③団地外友人仕事趣味仲間」「④家族・身内」の大きく4つの領域と考えられる。一方集合住宅の場合は、1軸・2軸とも負の領域は、「近隣の人」「団地内友人」「団地内役員」と団地内の親しい人・役員仲間と、「週に3回以上」、「団地内飲食店」「相手宅」等を使った近隣住民間の交流活動に対応する領域と解釈できる。次に1軸が正の領域では、2軸が負の領域が「団地内趣味仲間」と団地内の集会所や公園、その他の施設を利用した交流活動に対応し、2軸が正の領域が「団地外友人」「団地外趣味仲間」「団地外仕事仲間」の団地外仲間と、「月1回」程度の「団地外飲食店」「団地外施設」等での交流活動に対応する領域と考えられる。また1軸が負、2軸が正の領域には、交流相手が「親」「兄弟・姉妹」「親戚」「子息」、交流場所が「自宅」「道路・道端」で、「住まい」「冠婚葬祭」等に関する会話と、身内・家族等の血縁関係の人達との交流活動に対応する領域と言える。そして、2軸の正方向が団地外、負方向は団地内交流活動の領域と解釈でき、交流相手を主体とした「①近隣の人」「②友人

図3 平常時と災害後の交流活動の実態の対応分析(集合)

(団地内・団地外)」「③団地内役員趣味仲間」「④団地外仕事趣味仲間」「⑤家族・身内」の大きく5つの領域と考えられる。特に「友人」を主体とした交流活動がうかがえる。

4-2. 交流活動の実態の変化の特性

この平面に交流活動の「回数」「相手」「場所」「内容」のそれぞれの「平常時」と「災害後」の平均値をプロットすると、「交流回数」に関して大きな差異がみられる。図2,3は「交流回数」について「平常時」と「災害後」の回数によるそれぞれの平均値と、回数ほどの大きな変化はみられなかった相手、場所、内容の平均値をプロットしたもので、ここでは「交流回数」の変化について見てみる。

戸建住宅では、「ほぼ毎日」「週3回位」の人⇒「近隣の人」の方向に、「週1回位」の人は「団地内友人」「団地内役員」⇒「団地内趣味仲間」、「月1回位」の人は「家族・身内」⇒「団地内友人」「団地内趣味仲間」、「ほとんどない」人は「家族・身内」⇒「家族・身内」に変化している。それに対し集合住宅では、交流回数が「週3回以上」「週1回」の人は、災害後交流相手が「近隣の人」⇒「団地内友人・団地外友人(友人)」に、「年に数回・ほとんどない」の人は「団地外友人」⇒「団地内友人」、「月1回」の人は「団地外友人・役員趣味仲間」⇒「家族・身内」への変化がうかがえる。

これから戸建住宅の高齢者は、活発な人は「より近隣寄り」、不活発な人は「家族⇒団地外仲間」「より家族寄り」の2極化と、格差拡大の傾向を持っているのに対し、集合住宅の高齢者は、交流活動が活発な人は親しい友人へと「近隣離れ」の傾向を持ち、不活発な人は団地外趣味仲間から「家族寄り」「友人趣味志向」の2極化傾向が見られる。戸建住宅ではもともと地域との交流活動は集合に比べ活発な方であり、災害を契機に「より近隣志向」が強まった傾向であるのに対し、集合住宅では近隣⇒友人へと「友人志向」が強くなっていることから、地域との交流活動がより希薄化していると考えられる。またどちらの高齢者も不活発な人は家族へ特化し「家族寄り」傾向がみられ、益々地域との交流活動が弱くなり、社会関係資本の基礎として、強化が望まれる地域となってきたと言える。

5. 交流活動の意識(意見)の変化

この章では、自由記述回答文から表5に示す通り「交流意向」「現在の心境」「現在の生活状況」「災害時の生活・被害状況」「現在の不満」「今後の要望」「その他」と大きく7つの類型に分類^{注11)}した。

ここでは災害がもたらした高齢者の交流活動に対する意識を捉えるため「交流意向」に着目し、居住形態別にみてみることにする。

5-1. 自由記述回答内容の分類

高齢者の自由記述回答文の内容は、全般に「交流意向 64%」「現在の心境・生活状況 12%」「災害時の生活・被害状況 5%」「現在の不満・今後の要望 10%」「その他 8%」と、交流活動に関する意見が 6 割である。また、交流意向について細分類すると「前向 40%」「限定 19%」「不可 32%」「拒否 9%」と、交流活動が前向きで今後に期待し、災害後の交流に感謝している「前向」層が最も多い。また、交流施設や高齢、身体・体調、仕事などの理由で交流活動が出来ない「不可」層や、趣味の仲間や昔からの友人等と限定して交流している「限定」層、交流活動には興味がない・好きな趣味で楽しみたい等の「拒否」層と、地域の交流活動に支障のある層が 6 割となっており、特に集合住宅では「拒否層」の割合が戸建住宅より多いと言える。

5-2. 論理展開・文長等との対応分析

5-1 で得られた「交流活動の意見内容」に加え、「論理の展開」「文章の長さ」について表 6 の通り分類し、「性年齢」を含めた 4 つの要素とする 0-1 データに数量化Ⅲ類を適用した結果を図 4, 5 に示す。

固有値は戸建住宅の 1 軸 0.425、2 軸 0.315 で相関係数にすると 0.65、0.60、集合住宅では 1 軸 0.551、2 軸 0.467 で相関係数にすると 0.74、0.68 である。

戸建住宅の場合、1 軸の正方向は「交流前向」「交流限定」と交流活動に対して感謝・必要・期待感を抱き前向きな層や、趣味やスポーツ仲間等と相手を限定しているが交流は活発な方で、これらについて、300 字以上の長文で意見している「積極的・話題提供」の領域である。1 軸の負方向は「交流不可」「交流拒否」と健康面や高齢、交流施設等が原因で交流できない層や、今後も交流する気はなく趣味志向の層で、文書は短く交流活動への問題理由等を指摘している「消極的・単独志向」の領域と言える。2 軸については、意見文の論理展開から正方向は「補足・転換対応」、負方向は「逆接・添加対応」と解釈できる。戸建高齢者の意見は、男性は 65～74 歳と 80 歳以上では、交流は否定的で必要性を感じていない「交流拒否」、論理は「だから」「なぜなら」等の接続詞を使って前に述べた事柄の原因について後に述べている「順接・補足」、記述した文章の長さは「0～49 字」の領域にあり、単刀直入に交流活動の必要性のなさを指摘している様子がうかがえる。また 75～79 歳では「交流不可」、文章は前に述べたことと同じ事柄を後に述べる「添加・同列」と、逆に

表 5 自由記述回答文の分類

記述内容の分類型	「記述内容による分類」の概要		戸建		集合		回答数: %
	①交流前向	交流に対して前向や期待、必要、積極的、感謝、必要と考えている	84	16	100		
交流意向	②交流限定	趣味の仲間や町内会役員、スポーツ仲間、友人に限って交流している	42	5	47		250 (64%)
	③交流不可	交流施設や住居意識、高齢、体調、仕事、災害移住等でできていない	63	17	80		
	④交流拒否	無関心や単独、趣味志向、不要などから交流を必要としていない	16	7	23		
⑤現在の心境	現在の生活や今後の生活のあり方等に対する心境		23	6	29		47 (12%)
⑥現在の生活状況	災害後の現在の生活の状況など		14	4	18		
⑦災害時の生活・被害	災害時の生活状況や被害状況など		14	5	19		19 (5%)
⑧現在の不満	現在の時点における団地組織や団地造成、交通の便等の不満内容		16	4	20		43 (10%)
⑨今後の要望	今後、団地内の施設に対してこのようなあれば良いという具体的内容		19	4	23		
⑩その他	アンケート調査・内容に関する意見等		30	2	32		32 (8%)
合 計			391 (記述回答者数) / 1,213 (総数) = 32 (%)	321	70	391 (100%)	

表 6 交流・論理展開・文の長さの分類^{注 5)}

分類要因		分類内容(論理展開・文章の長さ)		総数(人)		合計	割合
				戸建	集合	(人)	(%)
論理	① 順接・補足	前に述べた事柄の原因・理由を後に述べる	だから、それで、なぜなら、ので、と、から	62	16	78	31
	② 添加・同列	前に述べた事柄と同じ事柄を後に述べる	そして、また、つまり、たとえば、	82	14	96	38
	③ 逆接・対比	前に述べた事柄と逆の事柄を後に述べる	しかし、ところが、いっぽう、が、けれども	48	11	59	24
	④ 転換	前に述べた事柄と全く違った事柄を後に述べる	ところで、それでは	13	4	17	7
合 計				250人	250	100	
文長	① 0～49字	記述した文章の長さで、記述回答欄の文字数が0～49字で書かれた文章		52	5	57	23
	② 50～99字	記述した文章の長さで、記述回答欄の文字数が50～99字で書かれた文章		52	14	66	26
	③ 100～199字	記述した文章の長さで、記述回答欄の文字数が100～199字で書かれた文章		49	10	59	23
	④ 200～299字	記述した文章の長さで、記述回答欄の文字数が200～299字で書かれた文章		26	8	34	14
	⑤ 300字以上	記述した文章の長さで、記述回答欄の文字数が300字以上で書かれた文章		26	8	34	14
合 計				250人	250	100	

違った事柄を後に述べる「逆接・対比」、文字は「50～99 字」「100～199 字」と、交流が特定の相手で、ある要因で考えていることと逆の方向へ論理を展開している。これは女性の 75～79 歳でも同様な傾向を持っている。しかし女性の場合は、65～74 歳や 80 歳以上では、交流活動に感謝し今後も積極的に行なおうとする姿勢や、前に述べた事柄と全然違った事柄を 300 字以上と長文で意見している領域に向いており、交流活動に対して積極的な姿勢がうかがえる。よって「①文章は短く原因をはっきり示し交流は不要」②文章は中程度で同じ内容を繰り返し、交流はしているが問題要因を持つ「③文章は長く違った事柄を多く述べ、交流への姿勢は積極的」の大きく 3 つの領域に分類できる (図 4)。一方集合住宅の場合も、交流領域の解釈はほぼ同様な傾向を持っている。男性では加齢とともに交流「拒否」⇒「不可」「限定」⇒「前向」の領域に変化し、また論理展開はほぼ「順接・補足」⇒「添加・同列」⇒「逆接・対比」⇒「転換」、文の長さも「短」⇒「長」に変化している。女性の場合は、75～79 歳において「補足・転換対応」が見られるが、加齢とともに「消極的・単独志向」⇒「積極的・話題提供」に変化している (図 5)。

図 4 意見文の対応分析 (戸建住宅)

図 5 意見文の対応分析 (集合住宅)

これらから、全般に交流活動の活発度は意見文の長さに比例し、文章が長いほど積極的思考の高齢者が多くみられる。また論理パターンは消極的な人ほど「順接・補足」で記述し、積極的になるにつれて「添加」「逆接」の要素を取り入れ記述し、積極的な人では「転換」と、その他の違った要素の内容を記述する傾向が見られる。居住形態別でみると、集合住宅の方では消極的思考の前期高齢層が多く見られるが、全般に加齢とともに積極的思考が強くなっている。

6. 感情カテゴリーによる意見内容の対応分析

5章における「交流意向」「論理・展開」「文章の長さ」を対象とした分析で得られた構造をより詳細に把握するために、交流活動の記述文の中から「感情カテゴリー^{注6)}」に着目し、災害を契機とした感情面の特性について、居住形態別に事例をまじえて明らかにしていくこととする。

6-1. 感情カテゴリーの出現頻度

交流活動に対する意見文の中から感情カテゴリーを抽出するために本研究では感情表現辞典^{注6)・10)}を参考にする事とする。また、基本的な感情カテゴリーをここでは、喜びや安らぎ等「穏やかな感情」を「正感情」、怒りや怖さ、驚き等「衝撃的な感情」を「負感情」とし2つに大別している。また、感情カテゴリーの出現頻度が2以上の人を「感情を多く抱いた」層として捉えている。基本感情の種類を表7、感情カテゴリーの居住形態別・出現頻度を表8,9に示す。

感情カテゴリーを抽出し出現頻度をみると、交流活動に対する意見のうち感情カテゴリーを記述した人は、戸建住宅 250 人の内 60 人で 24%、集合住宅では 45 人の内 29 人で 64%と、集合住宅居住者の方で感情表現の出現率が高い。また、その中で出現頻度が2以上の人を見ると、戸建住宅では 60 人中 26 人で 43%、集合住宅では 29 人中 19 人で 66%と、同様に集合住宅の人の方で出現率が高い。これから、感情を多く抱いていた層は、人数は戸建住宅の方で多いが出現率は集合住宅居住者の方で多いと言える。また、どちらも「哀」「喜」の感情の出現頻度が多く、その他戸建住宅では「安」、集合住宅では「怒」「怖」の負感情が多く出現している（表8,9）。

6-2. 感情カテゴリーと諸条件との対応分析

6-1で得られた「感情データ（出現頻度）」と「交流意向」「論理・展開」「文章の長さ」「性年齢」に着目し、居住形態別に数量化Ⅲ類を適用した結果を図6,7^{注12)}に示す。

固有値は戸建住宅の場合、第1軸 0.4548、第2軸 0.3857 で相関係数にすると 0.67、0.62 である。得られた軸のうち1軸は、交流内容と文章の長さから正方向「積極的・話題提供」⇔負方向「消極的・単独志向」、2軸は感情カテゴリーの頻度と論理の展開から、正方向が「厭-怖感情大・転換」⇔負方向「喜-安感情大・添加」に対応する軸と解釈できる。領域的にみると、戸建住宅では女性の 65～74 歳では1・2軸の正方向で、感情の出現頻度を見ると「哀」「厭」が最も多く「怖」「驚」の負感情も出ている領域にあり、文章は 300 字以上と長く指摘している。また、75 歳以上では2軸の負方向にあり「哀」がやや多く負感情で、交流活動は積極的であるが、災害時に哀れや驚きと恐怖の感情を抱いたことがうかがえる。それに対し男性ではどの年齢層も1軸の負、2軸の正方向に位置しており、「厭」が最も多く、次いで「喜」「哀」「好」が出現しており、交流活動へは敬遠的姿勢の方が多いが満足している様子もうかがえる（図6）。

表 7 感情カテゴリーの分類^{注6)}

基本感情	感情カテゴリー		語句の例		感情の正負
	1	喜(よろこび)	嬉しい、楽しむ、喜ぶ		正感情
	2	怒(いかり)	悔しい、ひどい、腹立たしい		負感情
	3	哀(かなしみ)	淋しさ、寂しい、悲しい		負感情
	4	怖(きょうふ)	怖い、不安な		負感情
	5	恥(はじ)	恥ずかしい		負感情
	6	好(すき)	好き、好む、愛する		正感情
	7	厭(いや)	煩わしい、嫌い、不快		負感情
	8	昂(たかぶり)	気が急ぐ		負感情
	9	安(やすらぎ)	気楽、安心、ほっと、温かさ		正感情
	10	驚(おどろき)	驚く、ハツとして		負感情

表 8 感情カテゴリーの出現頻度(2 以上、戸建)

戸建		感情カテゴリー(感情表現辞書・基本感情10種類)										出現頻度
No	サンプル	喜	怒	哀	怖	恥	好	厭	昂	安	驚	
1	13	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2
2	19	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
3	20	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2
4	30	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2
5	41	0	0	2	0	0	0	0	0	1	1	4
6	44	1	0	1	0	0	0	2	0	0	1	5
7	55	1	0	2	0	0	0	0	0	1	0	4
8	73	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2
9	89	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3
10	98	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2
11	106	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2
12	110	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2
13	116	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	2
14	130	0	0	4	1	0	0	2	0	0	0	7
15	150	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	3
16	162	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2
17	171	1	0	0	1	0	0	2	0	0	1	5
18	173	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2
19	178	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2
20	195	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	3
21	203	1	0	3	0	0	0	0	0	1	0	5
22	205	1	0	0	1	0	0	1	0	3	0	6
23	255	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2
24	300	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	2
25	311	2	0	0	0	0	0	3	0	0	0	5
26	333	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	2
合 計		16	0	19	3	0	3	14	0	20	5	80

注) 戸建住宅における「感情のカテゴリー」の記述者は、60 人でその中で出現頻度「1」が 36 人、「2 以上」が 26 人である。

表 9 感情カテゴリーの出現頻度(2 以上、集合)

集合		感情カテゴリー(感情表現辞書・基本感情10種類)										出現頻度
No	サンプル	喜	怒	哀	怖	恥	好	厭	昂	安	驚	
1	14	1	0	3	0	0	0	0	0	0	0	4
2	23	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	2
3	37	0	0	1	1	0	0	1	0	0	0	3
4	38	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	2
5	43	0	0	2	0	0	0	0	0	0	1	3
6	46	0	0	0	0	0	0	2	0	1	0	3
7	51	3	0	1	0	0	0	0	0	1	0	5
8	61	1	1	1	1	0	0	0	1	0	0	5
9	67	0	0	1	2	0	0	2	0	0	0	5
10	75	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	3
11	82	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2
12	83	3	1	1	0	0	0	0	0	0	0	5
14	88	2	0	2	1	0	0	1	0	0	0	6
15	92	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	3
16	93	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2
17	95	1	0	0	0	0	0	1	0	2	0	4
18	96	2	0	3	0	0	1	5	0	1	0	12
19	125	2	1	0	0	0	0	0	0	2	1	6
合 計		16	4	19	6	0	1	14	2	11	2	75

注) 集合住宅における「感情のカテゴリー」の記述者は、29 人でその中で出現頻度「1」が 10 人、「2 以上」が 19 人である。

集合住宅の場合は第1軸 0.5674、第2軸 0.4791 で相関係数にすると 0.75、0.69 であり、軸の解釈は戸建と同様の傾向である。男性は2軸の正方向にあり「厭-怖感情大・転換」の領域で、65～79 歳では「昂」「厭」「怖」等の交流活動に敬遠的姿勢の負感情が見られる。80 歳以上になると「喜」「好」等の正感情が多く交流活動に対し、やや前向きの感情がうかがえる。また、女性では2軸の負方向にあり「喜-安感情大・添加」の領域で、全般に加齢とともに、交流活動に対して消極的⇒積極的姿勢に移動し、文章も長くなっており比例関係が見られる。しかし、感情カテゴリーを見ると、80 歳以上では「哀」「厭」の頻度が多く、敬遠的姿勢がうかがえる（図7）。

6-3. 感情を多く抱いた層の事例

意見文で「感情カテゴリー」の出現頻度が5以上の高齢者の意見を要約したのが表10である。感情を多く抱いた要因について、居住形態別に詳細にみていくこととする。

図 6 感情・交流, 論理, 文長, 性年齢の対応分析 (戸建)

図 7 感情・交流, 論理, 文長, 性年齢の対応分析 (集合)

感情を多く抱いた層の全般的な特性は、①男性は 13 人の内 4 人と女性の方が多い。②年齢は、75 歳以上の後期高齢層がほとんどで、その中で半数が 80 歳以上と年齢層が高い。③意見文の論理展開は、「転換」の人が多い。④意見文の長さは、ほとんど 200 字以上で、300 以上の人は半数以上と長文である。⑤交流活動に関して「交流前向」層が約半数で、集合住宅の方で多く見られる。

居住形態別に内容を見ると、戸建住宅居住者では、「高年齢となって臆病な自分に啞然とすることがある。(女性 78 歳)」「高齢になると行動が億劫になる (女性 79 歳)」「老人だからと言って無理にしなければならないことはない。今は自分の時間を楽しみたいと言う人が多いのでは。(男性 75 歳)」「災害で知人に家財をあげたらお礼状が届いた。避難していたおばあちゃんが 1 人でさびしくしていたので接待した。(女性 80 歳)」「今回被害が大きくそれをしげしげと見に来て言葉もかけない不作法さ。人間不信に落ち込みました。(女性 72 歳)」等、「加齢による⇒億病・億劫さ」「老人⇒交流不要・趣味志向」「被害にあう⇒住民の不作法な態度⇒人間不信」等の負感情に

なった要因が示されている。

一方、集合住宅では「交流活動に行って、とても楽しく充実し一日中楽しかった。(女性 80 歳)」「現在民生委員をされていてストレスが多いが、ボランティアに関わることを楽しみにしている。(女性 74 歳)」「数年前に役員をしていたが入居者同士の醜いトラブルがあり、団地内交流の空しさをつくづく感じました。認知症が一番怖いので妹に確認してもらっている。(男性 78 歳)」「一人でも安心して眠れる日が来るのを願っています。(女性 85 歳)」「子供だけではなく年寄りにもいじめがあり落ち込みました。グループの一人がうそつきで可哀そうな人と思っている。なぜいじめはなくなるのでしょうか。本当に悲しいです。(女性 79 歳)」等、「民生委員⇒ストレス」「役員⇒入居者同士の醜いトラブル⇒空しさ⇒認知症の怖さ」「年寄り⇒いじめにあう⇒落ち込んだ」等と、集合住宅の女性の方では、災害後前向きな姿勢を持つ一方で、近隣住民の態度やマナーにより、「怒」「哀」の負感情となり、交流活動が大きく地域と疎遠となっている様子がうかがえる (表 10)。

表 10 感情カテゴリーの出現頻度 5 以上の人の意見文 (戸建・集合住宅、事例)

出現数	「感情カテゴリ」のある意見文(出現頻度5以上)	性別	年齢	論理	文長	交流
戸建住宅	高年齢となって臆病になっている自分に啞然とすることがあります。敬老乗車証は有りがたく心から感謝です。今後とも家にこもらず外出することが私の楽しみです。	女性	78	添加・同列	200～299字	交流前向
	町内のサークルに誘われるのがのんびりと自分のやりたいことで暮らす楽しみ方もある。断るのに苦労している。震災では食糧も我慢したが並んでも限界があり、強い人若い人が生き残るのだと強く感じた。お金があっても死ぬんだと感じた。本当にすごい災害でした。	男性	69	逆接・対比	300字以上	交流限定
	災害で知人に家財を上げたらお礼状が届き涙がでました。避難していたおばあちゃんが1人でさびしく門前にしよんぼりしていたので接待しました。大変喜んでいました。私は幸いに被害はほとんどなかった。	女性	80	転換	300字以上	交流限定
	老人だからと言って無理に交流しなければならないことではない。最近では映画鑑賞、アイボットでの音楽、ゲーム等誰にも束縛されず自由に楽しめます。健康維持という押し付けも嫌で、今は自分の時間を楽しみたいと言う人が多いのではないのでしょうか。	男性	75	添加・同列	200～299字	交流拒否
	高齢になると行動が億劫になる。団地に入る前子供達には施設や病院があるから心配しないでと言っていましたが、しかし、鶴寿園が無くなり残念です。近くに便利で安心な施設があれば大いに安心して行動したい。向こう三軒両隣との挨拶が笑顔で出来れば。	女性	79	逆接・対比	300字以上	交流前向
	リタイアして迷惑になるから電話もやめました。今回地震の被害が大きく危険なので解体を進められた。それをある人がしげしげと見に来て言葉もかけない不作法さ。人間不信に落ち込みました。それがうつになりとてもつらかった。	女性	72	転換	300字以上	交流拒否
出現数	「感情カテゴリ」のある意見文(出現頻度5以上)	性別	年齢	論理	文長	交流
集合住宅	交流活動に行って、とても楽しく充実し一日中楽しかった。親しい友人は話が長くなり、夕食まで遠慮なくいたでいて、満足感があります。でも結婚して数年で主人を病気で亡くし未亡人です。でも近隣や学校の同級生と付き合っています。現在民生委員をやっていてストレスも多いが、今更ながら関心を深めている。年を重ねるごとに目を見張る事柄が多くなり、後悔はしたくないがぐやしい感情になっている。ボランティアに関わることを楽しみにしている。	女性	80	逆接・対比	200～299字	交流前向
	数年前に公園の役員をしていたが入居者同士の醜いトラブルがあり、事件の仲裁や解決に努めました。しかし、団地内交流の空しさをつくづく感じました。認知症が一番怖いので電話で妹に確認してもらっています。	女性	74	添加・同列	200～299字	交流前向
	交流の場が無く淋しい限ります。老人が多く全て億劫なのか。今年は行事関係も削除、楽しさが失われたようです。敬老金の派手な行事ではなく感謝の念に立って物を実行する怒の精神が失われつつあることにに対し残念です。	男性	78	逆接・対比	300字以上	交流拒否
	この団地は毎年何らかの集まりがあり楽しみがありました。被害で日本全土が悲しみにつつまれたらどうなりますか。敬老金の派手な中には孤独の型も多いのですから、少しぐらいの楽しみをさせても苦情の攻撃はないのでは。	男性	83	転換	300字以上	交流前向
	大地震から6ヶ月。友人との楽しいお屋の後にこんな大惨事。被害のひどさが拡大しているような感じでした。一人でも安心して眠れる日が来るのを願っています。スポーツジムに行っても楽しく無理なく続いています。	女性	91	添加・同列	300字以上	交流不可
		女性	85	転換	200～299字	交流前向
	息子家族がそばに住んでいて安心で幸せです。子供にだけでなく年寄りにもいじめがあって、グループでの体操教室が生き甲斐だったのに半年間無視され落ち込みやめました。グループの一人がいじめた人がうそつきと分かり、私に誤ってくれ有りがたいと、今は楽しくお付き合いしています。その人は可哀そうな人と思っています。何故いじめはなくなるのでしょうか。本当に悲しいものです。	女性	79	転換	300字以上	交流前向

表11 意見内容からみた感情と実態の変化（戸建・集合住宅）

戸建住宅居住者の災害を契機とした「交流活動の実態と感情」					
地域との交流活動が疎遠となっている・なった要因と感情			地域との交流活動が前向きとなった要因と感情		
①	仕事で、平常時より交流活動がない・少ない。	⇒付き合いがもともと無かった。	①	安否の気遣い・水・食料のを頂いた。	⇒緊急時個人のつながりは、強くなる感じた。
②	自宅の被害がなかった・少なかった。	⇒交流というほどの付き合いがなかった。	②	いろいろな心遣いがあった。	⇒近隣の方の大切さを改めて感じた。
③	突然、避難生活に陥った。	⇒何もなく、絆形成はなかった。	③	仲間が助けてくれた。	⇒普段からの交流が、大事と痛感した。
④	支援物資の配給による不平等さを体験した。	⇒加齢により、独居老人の悲哀を感じた。	④	声を掛けてもらい、食料をもらった。	⇒高齢（91歳）で、とても嬉しかった。
⑤	自宅の被害を無言で見物された。	⇒人間不信に陥り、うつになった。	⑤	普段交流がなかったのに援助があった。	⇒隣近所が、非常に心強く感じた。
⑥	普段から団地外友人としか付き合わない。	⇒団地外の仲良しグループとの絆ができた。	⑥	災害時助け合い、心配し合った。	⇒平常時の交流が、大切と思った。

集合住宅居住者の災害を契機とした「交流活動の実態と感情」					
地域との交流活動が疎遠となっている・なった要因と感情			地域との交流活動が前向きとなった要因と感情		
①	他人の冷たさを知った。	⇒余計に家族・親戚の愛・絆が深まった。	①	声掛け・援助があった。	⇒困っていたので、感謝の気持ちであった。
②	隣の部屋の住民から、被害にあった。	⇒仕方なく、転居することに至った。	②	普段から地域のつながりが強い町内である。	⇒助け合いがあり、嬉しかった。
③	高齢者に、援助の声掛けをした。	⇒毎日来て無理難題を言うのでうとうとい。	③	身体が悪く高齢で、お互い援助・助け合った。	⇒自宅近くの知人の重要性を感じた。
④	入居者同士の醜いトラブルがあり仲裁した。	⇒空しさを感じ、うつになった。	④	声掛けで温かい気持ちになった。	⇒これまでの交流とは違って来たと思う。
⑤	年寄りでも、いじめにあった。	⇒相手がうそつきで、空しくサークルを辞めた。	⑤	一人暮らしの老人に安否確認と介護をした。	⇒震災前より多少話をするようになった。
⑥	加齢で、どこにも身寄りもなく孤立している。	⇒災害時も、交流はなかった。	注)ここでの地域とは、「町」または「団地」単位の「近隣(町丁目別の町内会・自治会の「班」程度の単位)」の集合体で、「町目全域」もしくは、「連合町内会」としている。 また、疎遠とは地域の住民と交流活動が「ないまたは、ほとんどない・少ない」状態で、前向きとは交流活動を今後「前向きに、活発に・増やそうとしている」状況を言う。		
⑦	仕事があり、隣との交流がない。	⇒自分の家だけで処理し、挨拶程度だけだった。			
⑧	主人が病気で支援物資も一度も頂かなかった。	⇒情報が何もなく、自分自身自宅難民と思った。			

6-4. 感情の変化と交流活動の実態との関係

ここでは表10の内容も含め、全意見文から災害を契機とした「感情面」の変化について、交流活動の実態との関係で見てみる。表11は災害後、「疎遠となった」「前向きとなった」要因（実態）と、感情（意識）についてまとめたものである。

災害を契機に、近隣・地域との交流活動が疎遠となった住民の要因は、戸建住宅の場合「平常時から交流活動がない・少ない」「被害がなかったので何もなかった」「避難生活に陥ったが何の援助もなかった」「支援物資の配給で不平等な態度をうけた」「被害を無言で見物され、人間不信になった」「団地外友人と付き合いが多く地域での援助がなかった」等である。また、集合住宅では「他人の冷たさを知った」「隣人の被害にあった」「入居者同士のトラブルがあった」「いじめにあった」「隣人との交流がない」「支援物資を一度も頂けなかった」等と、「普段の付き合いの無さ」「住民の姿勢」「隣人の被害」「トラブル」「いじめ」から、地域住民との「絆」の形成のつながりはなかったこと等がうかがえる。その他、「加齢」「本人の性格」「災害時における町内会組織への不満」「本人や家族の健康状態」「仕事の有無」「災害移住」「余裕」等も要因となっている。

それに対し、近隣・地域と交流活動が前向き（活発）になった要因は、戸建・集合住宅とも「安否の気遣い・食料などを頂いた」「声を掛けてもらった」「普段交流がないのに援助があった」等で、特に集合住宅では、ひとり暮らしの高齢者への「声掛け・援助」から、「絆」の形成のつながりとなっている様子がうかがえる（表11）。

7. まとめ

本研究で得られた結果をまとめると以下ようになる。

1) 交流活動の交流「回数」「相手」「場所」「内容」に着目し数量化Ⅲ類を適用した結果、交流相手を主体とした戸建住宅では「近隣の人」「団地内友人役員趣味仲間」「団地外友人仕事趣味仲間」「家族・身内」の4つの領域、集合住宅の場合は「近隣の人」「友人（団地内・団地外）」「団地内役員趣味仲間」「団地外仕事趣味仲間」「家族・身内」の大きく5つの領域が得られた。

2) 災害を契機として地域の交流活動は、戸建住宅では交流が活発な人は「より近隣寄り」に対し、集合住宅は親しい友人へと「近隣離れ」の傾向を持ち、不活発な人は、戸建住宅が「家族特化・家族より」「団地外寄り」と活発度の格差拡大傾向もみられる。それに対し、集合住宅では、団地外趣味仲間から「家族寄り」「友人趣味志向」の2極化傾向が見られ、集合住宅地は、団地の中でも益々社会関係資本の強化が望まれる地域となっている。

3) 交流活動に関する意識構造を規定する軸として、「交流内容」「論理展開」「文章の長さ」の分析からは、「消極的・単独志向⇔積極的・話題提供」「補足・転換対応⇔逆接・添加対応」、「感情カテゴリー」の分析からは、「消極的・単独志向⇔積極的・話題提供」「厭・怖感情大・転換⇔喜・安感情大・添加」という軸が得られた。

4) 交流活動をめぐる高齢者の意識は、記述文章が長いほど交流活動に対し積極的思考となっている。また論理パターンからは、交流活動が消極的から積極的になるにつれて「順接・補足」⇒「添加・同列」「逆接・対比」⇒「転換」という経緯をたどっており、積極的な層は違った論理を多く記述する傾向が見られた。戸建住宅居住者では、男性は消極的で不可⇒拒否思考、女性は積極的領域にあり前向⇒限定思考である。それに対し、集合住宅居住者は加齢により消極⇒積極、拒否⇒不可・限定⇒前向思考に変化しており、前期高齢層で交流が消極的な状況にあるが、全般に積極的方向へ変化している。

5) 感情カテゴリーの分析から、戸建住宅では女性は1軸の正方向、65～74歳で「哀」「厭」が最も多く「怖」「驚」の領域⇒75歳以上で「哀」がやや多く、交流活動は積極であるが災害時に哀れや驚きと恐怖の感情を抱いたことがうかがえる。男性では1軸の負方向で「厭」が多く、「哀」「喜」「好」も見られ交流に敬遠的姿勢を持つ一方で、自己的満足の感情も伺える。集合住宅の場合は、男性は「厭・怖感情大・転換」の領域にあり「厭」「怖」が多く拒否的思考、女性は「喜・安感情大・添加」の領域にあり、加齢とともに交流活動は消極的⇒積極的思考となっており、交流活動の活発化が期待されている。

6) 感情を多く抱いた人は集合住宅の高齢者で出現率が高く、災害